

精進

仮令身止 諸苦毒中 たとひ身を諸の苦毒の中に止くとも

我行精進 忍終不悔 我が行は精進にして忍んで終に悔いじ

生きることは、苦惱なるが故に、今日もまた静かに、大悲の願心にひたりつつ、幾度かこの偈を拝誦し、やがて大心海を念ずるが故に、いつしかに生きることの歡びは我によみがえるのである。

「樂は苦の種、苦は樂の種」と言う。

苦、必ずしも樂の種に非ず。

樂を予想しての忍苦は眞の忍苦ではない。

苦は何人も厭う所、我もまた自ら進んで苦を求めはしない。

されど仏智は我に教えた。人生は永遠に苦惱であることを。

忍苦……忍苦……しかしして忍苦、我が四十年の生活は、ただ忍苦の二字につきる。

ある時は宿命に泣いた。

ある時は、白眼世をすねて、悲觀厭世の底に沈んだ。

けれども、不平も、愚痴も、感傷も、涙も、逃避も、決して私を救ってはくれなかつた。

三宝に封する絶対帰依の生活がその中に生れた。

如来金剛の本願力のみが、私を救う唯一絶対の力であつた。如来の本願以外に、苦惱の解決を求めてはならなかつた。しかしして忍苦こそは、大地における唯一の正しい生き方であつた。

「いつまで続くぬかるみぞ……」 討匪行の歌が聞える。

私はかつては、努力の末には必ず幸福が、精進の結果には必ず平安が来るものと思ひ、そしてそれを求める心に苦しんだものである。

けれども、さうあるべき人生だと思ふ心が、更に深い悩みを生んだ。

眞實の精進は、それ自身決して、幸福を予想するものではない。精進の代償がたとえ、より一層の苦惱であろうと、精進を続けねばならぬところに、精進の意味があるのであつた。

私の一生は、ただぬかるみの連続なのだ。そう諦観する時、人生への随順がある。親しい同胞たちが、ぬかるみの中でもがいている。静かにそれを憶う時、たまらなくなる。だが、それらの同胞たちの友となれるのは、断えざる苦惱の中に立たされて来た恩恵である。

兄弟よ。忍苦に生きる姉妹よ。私は御身の上に生きますみ仏に合掌する。

精進には必ず、理想がある。彼岸があり、如来がある。

彼岸なく、理想なく、如来なき精進は無意味である。眞の精進ではない。

精進には必ず、忍苦をともしなふ。精進なき忍苦は、忍苦ではなくして、安価な盲従であり、屈従であり、宿命觀であり、無力であり、失敗であり、やがて不平や、悲觀

厭世やの母体である。忍苦なき精進は、真の精進ではなく、単なる欲望の動きである。我慢である。

菩薩が「我行精進、忍終不悔」と誓われたるゆえんである。精進には忍をとめない、忍苦には精進をはらむ。精進によつて、忍苦は真に忍苦となり、精進は忍苦と一体であつて、精進たることが出来るのである。そこには、決して「悔」はあり得ない。

しかしながら、かゝる精進はただ寂靜の樂より人生に來生する菩薩の願心においてのみ可能である。

かゝる精進と忍苦の一つなる天地においてのみ「我行」は成就するのである。行とは生活である。自利利他の生活である。菩薩行である。

我等は、念仏の天地において、ほのかに、菩薩のこの行信をうかがうものである。我等は念仏を知らぬ日に、人生の勝利や歡喜は、人間的幸福にあると思つた。そう思う限り、幸福になれば得々として、他のいかなる人も顧みず、己の幸福を持ち続けることに執着し、不幸逆境に出会えば、真つ暗くなつて、悲觀の底に沈んだであらう。

しかるに、そうした欲心は持ちつゝも、衷心の願においては、人生の真意義は、忍苦精進の中のみあり得ることを信知した。

忍苦精進は、大信心の中のみ孕まれる。そして念仏に生きることが、無上道を志求することである限り、如来淨土の本願によつてのみ念仏行者は生れるのである。

本願念仏に生きる者は、如来淨土の眷族である。この淨土の眷族として更生したるものが、正定聚の人である。人生に如来の光を輝かしむるが故に、淨土ならぬ人生に2生きつゝも、淨土国中の人である。

人生が永遠に淨土ならぬ世界なるが故に、淨土は人生に顯現し、如来は人生に輝くのである。

かくして我等は、如来の本願に生かされて、苦惱に充ちた人生の意味を発見することが出来、いよいよ忍苦精進の白道をふみしめて、徳を成就しようとするのである。